

ダニエルの書 - 第百十八号

エルサレムへの預言的警告：終末の出来事の象徴的な描写

Jeff Pippenger

2024-03-05

「エルサレムの通りという通りを行き来し、この都に臨む災いを告げ知らせた」男によって宣言された、紀元63年から70年にかけての七年間の警告は、まずキリストの宣教における三年半、ついで弟子たちの宣教における三年半という、エルサレムに与えられた警告によって予表されていた。すでに以前の記事で示したとおり、エルサレムの滅びは十字架の時、あるいはその後のステパノの石打ちの時に引き起こされ得たが、神の長い忍耐ゆえに、その都と民への裁きは猶予された。

そして、「それが誰の上に落ちかかっても、その人を粉みじんに打ち砕く」。キリストを拒んだ人々は、まもなく自分たちの都と国が滅ぼされるのを見ることになった。彼らの栄光は打ち砕かれ、風の前の塵のように散らされた。では、ユダヤ人を滅ぼしたのは何であったのか。それは、もしその上に建てていたなら彼らの安全の拠り所となったはずの岩であった。すなわち、蔑まれた神の慈しみ、退けられた義、軽んじられた憐れみであった。人は神に逆らう道を選び、本来なら彼らの救いとなるはずのすべてが、彼らの滅びへと変えられた。命のために神が定めたすべては、彼らには死となった。ユダヤ人がキリストを十字架につけたことのうちに、エルサレムの滅亡がすでにはらまれていた。カルバリーで流された血は、彼らをこの世においても来るべき世においても滅びへと沈める重しであった。同様に、神の恵みを拒む者たちの上に裁きが下る大いなる終わりの日にも、そうなる。彼らのつまずきの石であるキリストは、そのとき彼らには報復の山として現れる。義人には命であるその御顔の輝きが、悪しき者には焼き尽くす火となる。退けられた愛、軽んじられた恵みのゆえに、罪人は滅びる。

数多くの譬えと繰り返しの警告によって、イエスは、神の御子を拒むことがユダヤ人にもたらす結果を示された。これらの言葉において、主は、あらゆる時代においてご自分を贖い主として受け入れることを拒むすべての者に語りかけておられた。すべての警告は彼らのためである。冒瀆された神殿、不従順な息子、悪しき農夫たち、軽蔑する建築者たち——これらに対応するものは、すべての罪人の経験に見いだされる。その人が悔い改めないなら、彼らが予示した滅びはその人自身のものとなる。 *The Desire of Ages*, 600.

その人がエルサレムに対して証言した七年間の期間は、最初の包囲の時に、千二百六十日の等しい二つの期間に分けられた。その七年間はエルサレムの滅びを表していた。また、キリストと弟子たちの働きの七年間は、エルサレムの滅びの始まりを表していた。イエスはいつも、始まりを用いて終わりを示される。その七年間はまた、北王国に対する「七つの時」によっても予表されていた。「七つの時」は、千二百六十年ずつの等しい二つの期間に分けられていた。

現代ローマが、異教ローマと教皇ローマが実際のエルサレムと霊的エルサレムを踏みこじった歴史を繰り返し、また、現代ローマが、西暦63年から70年にかけてその人によって与えられた二度の警告期間に関する二つの歴史を繰り返し、さらに、現代ローマが、キリストと弟子たちが三年半のあいだエルサレムを出入りした二つの期間によって表される歴史を繰り返すとき、終わりの日には「時はもはやない」と言われているにもかかわらず、二つの明確に区別された期間が現れるであろう。

その二つの期間のうち最後のものは、間もなく到来する日曜法によってその致命的な傷が癒されたのち、現代ローマが忠実な者たちへの最後の迫害を遂行する象徴的な四十二か月である。その象徴的な四十二か月は二つの期間の第二であり、現代ローマに対する執行審判の期間である。その期間に先立って、ラオデキア的なアドベンティズムにおける生者の調査審判が行われる。

文字通りのエルサレムに警告を告げたその男は、ティトゥスの包囲戦で死んだ。彼は破壊のときに死んだのではなく、その破壊に先立つ包囲戦のさなかに死んだ。というのも、エルサレムの破壊ではキリスト者は一人も死ななかつたからである。

七年間、ある男がエルサレムの街路を歩き来し、この都に臨む災いを宣告し続けた。昼も夜も、彼は狂おしい哀歌を唱えた。「東からの声！ 西からの声！ 四方からの声！ エルサレムと神殿に災いを告げる声！ 花婿と花嫁に災いを告げる声！ 民全体に災いを告げる声！」-同上 この異様な男は投獄され、鞭打たれたが、彼の唇からはひと言の不平も漏れなかつた。侮辱や虐待に対しても、彼はただこう答えるだけだった。「わざわざだ、わざわざだ、エルサレムに！」「わざわざだ、わざわざだ、その住民に！」彼が予告していた包囲戦のさなかに殺されるまで、その警告の叫びが途絶えることはなかつた。『The Great Controversy』 29、30。

その人は包囲戦で死んだが、最終的な壊滅のときではなかつた。そして、その最終的な壊滅は猶予期間の終わりとして最後の七つの災いを表している。したがって、その人は最初の包囲の際にエルサレムから離れるよう促すメッセージの象徴である。そのときキリスト者たちは逃れ、最初の三年半において、その人はエルサレムで死なない一団の象徴であり、次の三年半においては、猶予期間の終わりの前に死ぬ最後のキリスト者たちの象徴である。第一の期間には彼は十四万四千人を指し示し、第二の三年半の期間には、その期間に死ぬ大群衆を表している。

その男のメッセージは歴史家によって記録され、六つの声で表された。ついに投獄されたとき、彼の第七にして最後のメッセージは、エルサレムとその住民に向けられた「わざわざだ、わざわざだ」であった。最初に記録された「声」は「東からの声」であり、最後のメッセージは「わざわざ」であった。彼のメッセージの最初の要素と最後の要素は、イスラムを表す聖書の象徴であった。というのも、聖書においてイスラムは「東」の子らであり、「東風」によって表されているからである。最後のメッセージにおける「woe」という語の重複は、地の王たちが三度「Alas, alas that great city」と叫ぶときの、現代バビロンの終わりを反映している。黙示録第十八章の三つの節で「alas」と訳されているギリシア語は、黙示録八章十三節では「woe」と訳されている。

そして私は見た。また、天の中空を飛ぶ一人の天使が大声でこう言うのを聞いた。「災いだ、災いだ、災いだ。地に住む者たちに、これから吹き鳴らされる三人の天使のラッパの残りの響きのゆえに！」黙示録 8章13節。

その男が「わざわざいだ、わざわざいだ」と告げることは、三つの災いの三重の適用を表している。というのも、第一の災いの要素が第二の災いの要素と「行に行を重ねて」結び合わされることで第三の災いの要素が特定されるからであり、ちょうど第十八章で地の王たちが三度「ああ、ああ」と言うことが、第一と第二の災いによって確立された第三の災いを表しているのと同様である。その男のメッセージの始まりと終わりは、第三の災いにおけるイスラムのメッセージを型として表している。

彼のメッセージの最初の表れは「東」からの声であり、「東」はイスラムの象徴であるが、同時に東に現れる封印の天使を識別するものでもある。

この後、私は見た。地の四隅に四人の御使いが立ち、地の四つの風を押さえて、風が地にも海にも、またどの木にも吹きつけないようにしていた。私はさらに、東の方から上って来る別の御使いを見た。その御使いは生ける神の印を持っており、地と海を害することを許されている四人の御使いに向かって大声で叫んだ。「私たちが私たちの神のしもべたちの額に印を押し終えるまで、地にも海にも、また木々にも害を与えてはならない。」そして、封印された者たちの数を私は聞いた。イスラエルの子らのすべての部族から、十四万四千人が封印されていた。ヨハネの黙示録 7:1-4。

カルメル山でのエリヤの物語において、彼が海の方を見て雲を見たとき、彼は西の方を見ていた。カルメル山は地中海の近くに位置しているからである。

七度目に彼は言った。「見よ、海から人の手のような小さな雲が上ってくる。」そして彼は言った。「上って行き、アハブに告げよ。『戦車を整え、下れ。雨に妨げられないように。』」列王記上 18:44

エリヤは、地中海の方角である西を向いていたはずだ。ルカによる福音書12章では、キリストはご自分のメッセージが分裂をもたらすものであることについて語っている。

あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらしに来たと思うのか。言うておく、そうではない。むしろ分裂である。これからは、一つの家にも五人いても、三人が二人に、二人が三人に対立して分かれる。父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対立して分かれる。また、人々にも言われた。「西から雲が昇るのを見ると、すぐに『にわか雨が来る』』と言ひ、そのとおりになる。南風が吹くのを見ると、『暑くなる』』と言ひ、そのとおりになる。偽善者たちよ。あなたがたは空や地の様子を見分けることはできるのに、どうしてこの時を見分けることができないのか。」ルカによる福音書12:51-56。

エルサレムへの使者のメッセージにはアルファとオメガの署名が記されている。というのも、その始めと終わりが第三の災いのイスラムを指し示しており、さらに「東」の声によって、イスラムのメッセージを封印のメッセージであると同時に特定しているからである。「西」からの「第二の声」は、最後の雨である後の雨を指し示し、預言者たちは皆、終わりの日々について語っている。「西」のメッセージは後の雨のメッセージの象徴で

あり、それは二種類の礼拝者を生み出す。一方の者たちは「この時を見分けない」ため、後の雨のメッセージを認識できない。

使者のメッセージの次の要素は「四つの風」の声であり、それは封印のメッセージであると同時に、第三のわざわいによって表されるイスラムの「怒れる馬」のメッセージでもある。続く要素はエルサレムと神殿に向けられたもので、これによって、すべての預言者のメッセージが示してきた事実——すなわち、救いの拠り所をキリストではなく神殿と選民としての系譜に置くがゆえに神の働きに通らざらされている一群の人々がいること——が明らかになる。彼らは聖なる歴史を通して、「主の宮、主の宮、我らこそ主の宮だ」と宣言する者として描かれている。エルサレムと神殿に対するこのメッセージこそ、ラオデキヤのメッセージである。

教会が聖霊の力によって生かされていないことを不思議に思うには及ばない。男女はキリストが与えた教えを退けている。怒りと貪欲が勝利を収めている。魂の神殿は悪に満ちている。キリストの入る余地がない。人々は自分の曲がった道を歩む。彼らは救い主の言葉に耳を傾けようとせず、戒めと警告を退け、自分の思うままに事を運び、ついには燭台がその所から移され、靈的識別力が人間的な考えによって混乱させられる。奉仕において欠けがあるのに、彼らは「主の宮、主の宮、私たちは主の宮だ」と言って自らを義とする。彼らは神の律法を脇に置き、自分の思いによる光に従う。Review and Herald、1902年4月8日。

そこで使者は、“line upon line”という方法論の象徴として、花婿と花嫁に対する警告の声を高らかに上げた。なぜなら、終わりの日々の預言の展開はノアの時代のそれと同じになるからであり、破壊の大洪水が彼らの世俗的な野心や計画を押し流そうとしていたまさにその時に、人々は結婚していたからである。

「聖書は、終わりの日には、人々が世俗的な営み、快樂や金儲けに没頭するようになると明言している。彼らは永遠の實在に盲目になる。キリストは言われた、『ノアの日と同じように、人の子が来るのもそうである。洪水の前の日々、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁がせたりして、ノアが箱舟に入ったその日まで続き、洪水が来て、すべての者をさらい去るまで、それと知らなかった。人の子が来るのも、そのようである。』マタイ24:37-39。」

今日もまた同様である。人々は、神も天も来世もないかのように、利得を追い求め、利己的な享樂にひた走っている。ノアの時代には、洪水の警告が、悪のただ中にある人々をはっとさせ、悔い改めに呼びかけるために送られた。同様に、キリストの近い再臨のメッセージは、人々をこの世の事柄への没頭から目覚めさせるためのものである。それは、彼らに永遠の現実を自覚させ、主の食卓への招きに耳を傾けるようにさせることを意図している。

福音への招きは、全世界（「すべての国民、部族、言語、民族」）に与えられるべきである。黙示録14章6節。最後の警告とあわれみのメッセージは、その栄光によって全地を照らす。これは、富める者にも貧しい者にも、身分の高い者にも低い者にも、あらゆる階層の人々に届くべきである。「大路や生け垣のところへ出て行き、彼らが無理にでも入って来させなさい。わたしの家が満ちるためである」とキリストは言われる。『キリストの実物教訓』228ページ。

警告の最後の要素は、前の箇所でも強調されている。「すべての民」に対して語る声として表されているそのメッセージは、永遠の福音であり、救われるためには福音の要件を満たす必要があることを示している。永遠の福音の第一の要件は神を恐れることであり、その恐れは、生ける神の御子であるキリストを十字架につけたのは私たちの罪であったという現実に基づいている。

エルサレムへの使者の七年間の奉仕におけるすべての要素は、永遠の福音を表しており、それは、キリストが27年から34年にかけて多くの者と契約を確認した七年間に提示されたのと同じ福音であった。また、それは終わりの時の最後の二つの期間においても宣べ伝えられる永遠の福音であり、後の雨のメッセージに特有で、すなわち第三のわざわいのイスラムのメッセージである。それは、十四万四千人の封印、麦と毒麦の分離、毒麦のラオデキヤの状態、そして後の雨の方法論（「line upon line」）の象徴としての預言の三重の適用を示している。

その歴史における七年間のメッセージは、キリストのメッセージと御業が最初に言及された際の一部を成していた「報復の日々」という預言的な枠組みの中に位置づけられている。そして終わりの時代には、そのメッセージと御業が十四万四千人によって繰り返される。彼らは自らのメッセージを「神の報復の日々」という預言的な枠組みの中に位置づけるだろう。神の御言葉に示されている神の「報復」には二つの聖書的な型があり、一つは神の民に対する報復、もう一つは神の敵に対する報復である。

レビ記26章の「七倍」は、神に反逆する民に対する神の復讐を示しており、その復讐には、聖所と軍勢を文字どおりにも霊的にも踏みこむことが含まれている。聖所と軍勢の踏みこむという象徴の中には、神の敵に対する神の復讐の象徴もまた表されている。終末の時、まもなく来る日曜法に際してラオデキヤ的アドベンチズムが吐き出されること、神の民に対する神の復讐として表されている。その道標において、現代のバビロンに対する神の復讐もまた始まる。

ラオデキヤ的アドベンチズムにおいて生ける者に臨む調査審判と、それに続く、ツロの淫婦および彼女が乗って支配する獣に対する執行審判とは、終末の時代における預言的歴史であり、そこではあらゆる幻が成就する。すべての幻はその二つの預言的時期に適用されるべきである。というのも、後の雨の方法論とは、預言の線に預言の線を重ねて適用することだからである。それら二つの歴史の初めに、イエスは、その時点に生きている者たちが地上の歴史の最後の世代に在ることを証明する「しるし」を示された。

最初の期間は、2001年9月11日に十四万四千人の封印が始まったときに始まった。その道標において、ルカ二十一章でキリストが示した「しるし」が据えられた。

次回の記事でこの研究を続けます。

さて、兄弟たちよ、神は、私たちが灯を掲げる人の側につくことを望んでおられます。私たちは、光のあるところ、そして神がラツパに確かな音を与えられたところに、立ちたいのです。私たちも、そのラツパに確かな音を響かせたいのです。私たちは困惑し、疑いに陥り、諸教会は今にも死にかけています。しかし今、ここにこう記されています。「この後、私は、大いなる権威を帯びたもう一人の御使いが天から下って来

るのを見た. 地は彼の栄光によって照らされた. 彼は力強い大声で叫んで言った、『大バビロンは倒れた、倒れた. そして、それは悪霊どもの住みかとなり、あらゆる汚れた霊の巣窟、すべての汚れた憎むべき鳥の檻となった』」[ヨハネの黙示録 18章1-2節]

さて、天の光が私たちに臨むとき、それを少しでも認識できる状態にいないのなら、いったいどうしてそのメッセージについて何かを知ることができるでしょうか. しかも、神の御霊が彼らを遣わしたという一片の証拠もないのに、私たちに同意する誰かからやって来るものであれば、最も暗い欺きでもたやすく受け入れてしまうのです. キリストは言われました、「わたしは父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れない」[ヨハネ5:43参照]. さて、これこそが、ミネアポリスでの会合以来ここでずっと行われてきたことなのです. 神がご自分の御名によってあなたがたの考えに一致しないメッセージを送られると、それは神からのメッセージではあり得ないのだと[あなたがたは結論づけるのです]. 『Sermons and Talks』 第1巻、142ページ.